

# 脱・殿堂

神戸芸術工科大学 学長  
松村 秀一  
Shuichi Matsumura

## 「本郷」

個人的な思い出にお付き合いいただいて恐縮だが、五〇年前の春に東京に引越してきた。杉並区久我山の昔ながらの賄い付き下宿だった。駒場（目黒区）に通う一、二年生が八名、それぞれ四畳半にもならない広さの部屋で暮らしていた。三年生になるとほとんどの者が学部進学で本郷（文京区）に移る。だからこの下宿に暮らすのは二年生だけだった。

駒場キャンパスは戦前に一高があったところで、元々大学ではなかった。一方本郷は、夏目漱石や森鷗外の小説に出てくる元の帝大。一、二年生が行くことはほとんどな

いが、たまに先輩を訪ねて行った者が、「図書館が本物だったぞ」とか「〇学部の建物が重厚だったぞ」とか、結構感激して帰ってくるのだった。

実は本郷も関東大震災でほとんどの建物が倒壊し、「本物」「重厚」とは言っても、漱石や鷗外が経験したものでなかったのだが、そんなことは知る由もなく、早く本郷に行

きたいと願うのだった。十代の若者の学問の「殿堂」への憧れである。

## 内藤廣さんの最新作

かつてお隣の社会基盤学科の教授を務められた建築家の内藤廣さんの事務所から、内藤さんが学長を務めておられる大学の本部棟を設計していたが、それが完成したとい

う知らせを頂いた。

同じ芸術系の大学ということもあって、是非にとお願いしてご本人に案内していただいた。設計の密度、創る建築の孤高の品質。そうした建築家内藤廣の特長はこの建物のあちらこちらで見出せ、とても嬉しく思ったが、一番感心したのは、この建物が色々な面で「ひらかれた」ものになっている点だった。

周りは住宅地で、建物の位置は東京の主要幹線、環状八号線に面している。一階に天井の高いホールと広いギャラリーが、地下一階に壁二面全体がスクリーンになるメディア・ラボがあり、入構しなくてもいきなり環状八号線側から入れるようになってる。

理事長室と学長室のあるフロアには、遠くまで見渡せるバルコニーとガラス越しに繋がる気持ちの良いリビングルームがあり、学生の誰もがくつろげるようになってる。

## メデイジン

社会基盤学、建築学、都市工学という三つの専攻が中心になって、「都市空間の持続再生学」に関する研究・教育プロジェクトに取り組んでいた二〇〇五年。コロンビアのウリベ大統領が同国の二〇程の大学の学長を従えて来日されることがあった。

その学長団が東京大学総長を表敬訪問された。当時ひよんなことから私がその仲介役を務めたのだが、その後すぐに「都市空間の持続再生学」のメンバー複数名が、コロンビア政府から招待を受けて、首都ボゴタと第二の都市メデイジンを訪



内藤廣さんたちが設計し2008年に完成したコロンビアのメデイジン市ベレン公園図書館。子どもたちが楽しく遊ぶ「水の広場」。ひらかれている(撮影:内藤廣氏)

れた。都市の様々な問題の解決に日本の「都市空間の持続再生学」が貢献することを期待されてのことだった。

大きな問題の一つは貧困の問題。もつと明確に言うならば、貧富の大きな格差の問題だった。

その問題への取組みの一例として、メデイジンで元監獄の建物を転用した地域福祉施設を見学した。築百年の煉瓦造建物だった。その中の図書館。建築的には特に見るべき

ものはないように思えたが、その管理を担当している若い男性の、たどたどしいながら一所懸命な英語（彼にとつての外国語）による説明に感銘を受けた。

彼はこの建物に近いスラムの出身で、十代の頃にはギャングまがいの生活を送っていたという。ところが、ある日この図書館で本に、本の世界に出合ったのだと言う。彼らは学校で文字を習うが、家に帰ったところで本もなければ新聞もない。文

字が一切ないのだ。だから、文字を学ぶ意味などどこにもないと思っていた。そんな彼が図書館で本に出会う。そこには家で決して見ることもない文字があふれ、それを追うと、今まで見たことも想像したこともない世界が圧倒的に広がっていた。彼は更生した。そして、自分と同じ境遇にある少年少女のためにこの図書館で働き始めた。

日本では想像もつかなかった。図書館というものに、こんな役割があったなんて。

この見学の直後、メデイジンの役所の方から、いくつか計画している地域図書館の内の一つの設計を、日本の有名な建築家に頼みたいという相談を受けた。即座に内藤さんの名前を挙げた。帰国後お話ししたところ、内藤さんは快く引き受けて下さった。そして、内藤さんもすぐにメデイジンでの図書館の社会的な意味を認識されたとお聞きした。内藤さんは素晴らしい図書館を実現して下さった。やはり「殿堂」ではなく人々にひらかれた建築であった。